

京都府教育委員会教育長 様

令和8年3月10日

ラ ボ 名 TRYあんぐる
代表者所属名 京都府立井手やまぶき支援学校
代表者職・氏名 教諭・緒方 紗夜

京都府立学校授業力等向上ラボ支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 ラボ名

TRYあんぐる

2 研究テーマ

知的好奇心を育む学びの場としての特別支援学校の学校図書館構想～現状を打ち破れ!特別支援学校図書館リボン計画～

3 研究の目的

特別支援学校の学校図書館の課題を明らかにするとともに、図書館の環境・設備・蔵書・運営体制の充実を図るための要素を考える。また、探究的な学習や学習意欲の向上と読書活動の関連性について具体的な実践例から見出すことで、読書活動の重要性を認識した上で、自校の学校図書館の改善につなげる。

4 研究の成果と課題

<研究の成果>
・すべてのラボ参加者の所属校の図書館を視察し意見交流したことで、各々が自校の図書館環境・設備・蔵書・運営体制に関する現状を把握し、課題だけでなく自校の強みや特色を再認識することができた。
・他校のラボ参加者から得た新たな視点や発想に触れることで、自校だけでは見えにくかった改善策を具体的に導き出すことができた。
・視察を進める中で、ラボ参加者同士が質問や疑問を積極的に出し合い、互いのアイデアを共有した。この対話を通して、既存の枠にとらわれず“逆転の発想”で考えることの重要性に気づくことができた。その気づきを基に、各自が自校の強みを生かした図書館運営の方法について

て考察する機会となり、今後の方向性を検討する上での大きな手がかりとなった。

- ・学校独自の選書方法や様々な取組について情報交換を行う中で、読書バリアフリーに向けた設備の活用方法や必要な支援に関する学びが深まった。

<課題点>

- ・図書館環境や設備、蔵書、運営体制については学校ごとに課題は異なるが、改善が必要な点があり、物理的な制約や予算面の困難さが課題として残っている。
- ・課題を明らかにするだけでは改善が進みにくく、他校の視点を生かしながら実現可能な具体的な方法の検討や模索が必要となる。
- ・読書バリアフリーを目指すための具体的方策を考えること。

5 研究成果の波及方法

◎ラボメンバーによる視察報告の校内共有

各参加者が所属校で視察内容を教職員へ報告する機会を設ける。

各校の図書館環境・運営体制・選書方法・読書バリアフリーの工夫など、視察で得られた具体的な学びを共有し、所属校の現状を客観的に把握し図書館の役割・方向性について校内で共通理解できるようにする。

◎自校の課題を強みに転換する取組の試案・実践

視察等から得た新たな視点をもとに、それぞれの学校が抱える課題を「強み」に変える取組をラボメンバーが主体となって試案する。レイアウトの工夫、選書の工夫など小規模で試せる実現可能な改善を実践する。

6 研究（活動）実績*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
7月23日	研究目的と目標の共有、研究テーマの詳細確認、役割分担とスケジュール作成、意見交換等、1年間の研究について確認検討を行った。 図書館「ほんの森」を視察し、成果と課題について共有した。	南山城支援学校
7月29日	実践報告会へ参加。 現段階での各校の取組について発表を行った。 赤木かんこ氏による講演会に参加し、選書の工夫や分類・配架等、図書館の基本について学ぶ機会とした。	宇治支援学校
9月24日	図書館の視察を行い、成果と課題について共有した。 外部との連携（国際子ども図書館）の活用について知る機会となった。	城陽支援学校
12月16日	以下の視察項目をもとに、他府県学校視察を行った。 ① 読書バリアフリーの観点からの環境整備について ② 蔵書選定の方法や工夫について	各務原市立かかみがはら支援学校

	③ 図書館を活用した授業実践について ④ 図書館利用方法や貸出、ICT活用等、システムについて ⑤ 学校外の関係機関との連携について ⑥ 校内組織の在り方や教職員の連携、職員研修の計画等について	
1月26日	図書館の視察を行い、成果と課題について共有した。施設設備、環境面での改善案について情報共有を行った。 次年度のラボ活動について検討を行った。	八幡支援学校
3月2日	図書館の視察を行い、成果と課題について共有した。読書表彰式等、読書の取組について参観した。SLAの会議に参加し、実践報告を行った。 野口武悟氏の講演会に参加した。	井手やまぶき支援学校

7 予算執行状況

- (1) 旅費・研究会等参加費は、旅費等執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	知的好奇心を育む学びの場としての特別支援学校の学校図書館構想～現状を打ち破れ!特別支援学校図書館リボン計画～
育てたい資質能力	<p>子どもたちに育てたい資質能力として、①知的好奇心や探究心 ②読書バリアフリーによる情報活用と選択する力 ③読書活動から広がるコミュニケーション力・表現力の3点である。</p> <p>子どもたちが自分の興味に気づき、知りたいことを調べ、新しい世界に出会うためには、適切な環境設定が必要である。また、さまざまな媒体から情報を読み取り、自分に合った方法や環境を選び、主体的に学ぶために、アクセスしやすい図書館であることが重要である。本を通して人と気持ちや考えを伝え合う経験は、コミュニケーションや表現の力を育てる大切な機会となる。</p> <p>こうした力を育てるために、図書館の環境整備から取り組むことが必要であると考え、図書館の環境・配架・表示・空間などの改善に重点的に取り組んでいる。</p>
実践又は研究の具体的内容	<p>Ⅰ 視察と課題検討による、上記の資質能力を育てる図書館の環境改善</p> <p>○ラボ参加者の所属5校の図書館視察</p> <p>各校の図書館環境・設備・蔵書、そして運営体制の現状を多面的に把握することができた。自校と参加者の所属校を比較することで、課題の把握にとどまらず、自校が持つ強みや特色を再認識できたことは大きな成果である。また、他校の教員から新たな視点や実践例を得たことで、これまで気づきにくかった改善策を具体的に検討するきっかけになっている。</p>

○岐阜県各務原市立かかみがはら支援学校の図書館視察

視察を通して、図書館環境の整備や地域との連携に関する先進的な実践を具体的に学ぶことができた。広い空間を生かした開放的なレイアウト、アクセシブルな蔵書の充実、地域ボランティアとの協働体制づくり等、所属校でも参考となる重要な視点であり、大きな学びとなった。図書館の利用促進や地域開放を進めるうえで、選書方針の見直しや、児童生徒が地域とつながる学びの仕組みづくりを検討するための有効な視点となった。またこれらは、今後の改善に向けた方向性をも示している。

2 特別支援学校における図書館運営方法の模索

視察を積極的に行うことで、物理的な整備だけに目を向けるのではなく、各校の強みを生かした“逆転の発想による図書館運営”について考察することができた。たとえば、図書館の構造そのものを変える発想ではなく、既存の環境を利活用する視点が重要であると再認識した。

○既存環境を生かしたレイアウト工夫

図書館が、昇降口から教室までの経路の近くにあるという特性を利用し、棚の配置を工夫して「移動しながら自然と本に触れられる空間」をつくる。

図書館内に置かれている、販売用ワゴンを移動図書館として活用するなど、不便を強みに転換する工夫。

既存の構造を変えるのではなく、「今あるものをどう使うか」という発想が重要であることを確認した。

○課題から発想した読書空間づくり

寒暖差に弱い環境という課題も、発想次第で魅力に変えられる。

子どもたちが防寒グッズを持ち寄って集まる様子から発想を得て、こたつ風読書スペースの設置やテントを使った“特別感のある読書空間”の設定を試みるなど、課題を逆に活かして、子どもが自然と集まる図書館環境をつくれることを学んだ。

○外部機関・地域資源の活用による運営改善

予算的制約がある中でも、外部資源を用いることで可能性が広がることを共有できた。府立図書館、京都国際マンガミュージアム、国際子ども図書館、様々な助成団体など、これらの外部機関の支援や地域資源を活用することで、実現可能な取組が多数あることがわかった。

○読書バリアフリーの推進につながる視点

視察から得られた学びは、読書バリアフリーの向上にも直結する。

見やすい導線づくり、必要に応じた設備の選択、“誰にとっても使いやすい

	<p>い学校図書館”の実現へ向けた改善点が具体化されていく。使いやすさ・アクセスしやすさを重視したハード面の改善につながる視点を獲得することができた。</p> <p>○時間・距離の制約に対応する柔軟な工夫</p> <p>図書館の場所や開館できる時間に制約がある学校でも、工夫次第で読書機会を確保できる。プロジェクター・放送設備を使った読み聞かせや、廊下への可能範囲内での配架、すき間時間にすぐ使える点在型図書スペースの設置など、学校環境に合わせた多様な工夫を共有することができた。</p> <p>これらの視点の転換によって、今後の図書館運営の方向性を見だし、よりよい運営方法を検討するための重要な示唆を得ることができた。</p>
--	--